

〈訳註研究〉

Bhāmaha 著 Kāvyaḷamkāra 『詩の修辞法』 第5章

— テクストならびに訳註 —

古宇田 亮修

はじめに

サンスクリット文化圏における修辞法 (alaṃkāra-) に関する研究は、いわゆるインド古典修辞学という独自の学問領域を形成するまでに発展を遂げ、現在に至るまで多数の論書が残されている。このうち現存する論書として最も古いと考えられているのが、Bhāmaha 著 Kāvyaḷamkāra 『詩の修辞法』と、Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』の両書である。両書の成立年代については、多年にわたる研究者の努力にもかかわらず未解決であり、また両書の先後関係についても確定していない。

Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa については、筆者も参加しているサンスクリット修辞法研究会（大正大学総合佛教研究所内）において、2007 年以来、共同研究を遂行しており、その研究成果として全章の訳註を公表した¹。全6章から成る Kāvyaḷamkāra については、第1～4章の訳註を当研究所年報に発表してきた²。本稿はそれに続く第5章のローマナイズテキストと訳註であり、インド古典修辞学解明の一助となることを目指した。尚、本稿の作成にあたり、長島潤道氏を始めとして、サンスクリット修辞法研究会のメンバーより種々の御教示を頂戴したことを銘記し、ここに謝意を表する次第である。

¹ [Skt 修辞法研究会 2008～12].

² [古宇田 2009～11].

Kāvyaḷamkāra 第5章の主題

Kāvyaḷamkāra は、全6章、400偈から成るが、第5章はそのうち69偈を占めている。

第5章では、証因 (hetu-) に関する正理 (nyāya-) を主題とし、第4章に引き続き、正理の視点から詩における欠陥について論じている。

Bhāmaha は本章のねらいを、冒頭において次のように述べている。

「5.1. これより、主張命題^{ブラティジニャー}や証因^{ヘートク}等の欠落と欠陥とが、簡潔かつ正理^{ニヤヤ}に従って、それ (= 正理) 一般の事義^{いみ}の理解のために叙述される。

5.2. たいてい、知力に乏しい人々は難解であることから教典を恐れる。彼らの説得のために、この証因^{ヘートク}に関する正理^{ニヤヤ}の摘要が〔作られたのである〕。」

このように述べて、Bhāmaha が、詩人の教養としての正理に関する知識に1章 (全69偈) を割いていることは、もう一方の著名な修辞学者 Daṇḍin がとった態度と対照的である。

すなわち、Daṇḍin も、詩における矛盾を3種——すなわち、常識 (loka-) との矛盾、正理 (nyāya-) との矛盾、聖伝 (āgama-) との矛盾——に大別し、正理とは、証因に関する真理を中心とするものである (hetu-vidyātmaka-) と定義している (3. 163c) が、Daṇḍin は正理との矛盾については、3偈の説明で済ませている (3. 173c-176b)³。この事実から推測すると、Daṇḍin は、正理に関する知識は、それと矛盾すれば問題であるにせよ、すぐれた詩を作るのに必須のものとは考えなかったのであろう。

これに対し、Bhāmaha は、正理で重視される論証の方法や、論理的矛

³ そのうえ、Daṇḍin は、仏教やサーンキヤの教義を指して nyāya-と呼んでいるので、Daṇḍin の nyāya-に対する知識は深いものとはいえず、Bhāmaha のように Dignāga の著作を学習したとは考えがたい。

盾を知っていることが、すぐれた詩を作るのに必要であると考えたのであろう。とはいえ、Bhāmaha は、正理に関する教典が、論証を目的とする (5. 32) のに対し、詩は常識に依拠するもの (5. 33) であり、良き詩の創作は、人々をして、正法・実利・愛欲・解脱・芸術に関する熟達をもたらすもの (1. 2) であるとし、両者の目的をけっして混同することはなかった。

Bhāmaha は、本章の最終偈で次のように述べている。

「5. 69. 以上、この言葉に関する諸々の修辭法^{かざり}は、私が他の〔学者の書いた〕多くの種類の書物を参照し、そして自分で考えてから述べたものである。ここにおいて、〔正理に〕精通し論述をなした他の聖者たちは、〔私にとって〕認識根拠で〔あった〕。心に確信が得られていない人々によっては、すぐれた智慧をもつ人々の十分な満足を得られないからである。」

Bhāmaha 在世当時、正理に関する著作、例えば、Nyāyasūtra やそれに対する註釈や、仏教徒 Dignāga の著作（例えば、Pramāṇasamuccaya, Nyāyamukha 等）が存在していたことは間違いなく、Bhāmaha は、これら先学の著作を学習した上で第5章を執筆したことは、本文に種々の証拠が見られる。しかしながら、わずか 70 偈弱で、正理と詩作の関係を初心者に説明するというのは誰であつてもきわめて困難な作業であろうし、簡潔に述べようとして表現を圧縮すればするほど、読解が困難になることは明白である⁴。その意味で、本章における Bhāmaha の執筆意図が十分に達成されたかについては疑問の余地が残る。

また、このような正理に関する議論が詩作にとって本質的に重要ではないとみなしたであろう Daṇḍin の態度にも十分な説得力があり、

⁴ さらに、訳者自身も論理学に対する知識が浅いため、Bhāmaha の本意を読み取れず、誤訳を犯している可能性を否定できない。識者による御教示を切に乞う次第である。

Kāvyaḷaṃkāra に関する古註が伝承されてこなかったのは、Daṇḍin より後のインド人によっても同様に判断されたことが一因であるのかもしれない。さらに、Kāvyaḷaṃkāra 第5章は、単体では理解が難しいことにくわえ、正理自体を学ぶのであれば、それを主題とする別のテキストを学習した方が得策であったと考えられることも、古註が伝承されなかった要因として考えられよう。

テキストと訳註について

本稿に掲載したローマナイズテキストは、基本的には N 本を底本として、K 本、M 本、U 本の読みも校合したものである。ただし、意味のない誤写・誤植とみなされる異読については省略した。ローマナイズに当り、Sandhi 表記の統一は断りなく行なった。なお、用例部分はイタリックで表記し、翻訳においては、9 ポイントで示した。その他、翻訳に関する凡例は以下の通りである。

- ① 意味の説明は、() 内に記した。
- ② 翻訳上の補足は、[] 内に記した。
- ③ 掛詞 (śleṣa-, śliṣṭa-) のもう一方の意味は、《 》内に記した。
- ④ 本文にない見出・解説 (訳者によるもの) は 〈 〉 内に記した。

〈略号ならびに主要参考文献〉

〈Kāvyaḷaṃkāra のテキスト〉

K. *Kāvyaḷaṃkāra of Bhāmaha*, Ed. Butuk Nāth Śarmā and Baldeva Upādhyāya, *Kaṣhi Sanskrit Series*, 61, 1929 (repr. 1981).

Ka. Ms. in K.

Kha. Ms. in K.

Ga. *Kāvyaḷaṃkāra of Bhāmaha. Appendix VIII of the Pratāparudrayaśobhūṣaṇa of Vidyānātha*, Ed. K. P. Trivedi, Bombay, 1909. (未見), Cited in K.

Gha. Ms. in K.

M. *Kāvyaḷaṃkāra of Bhāmaha, Pariccheda 1 to 6 with English Translation and*

Notes on Paricchedaś 1 to 3, Ed. C. Sankara Rama Sastry. Madras, 1956.

- N. *Kāvyaḷaṃkāra of Bhāmaha, edited with English Translation and Notes*, Ed. P. V. Naganatha Sastry, Delhi, 1927 (repr. 1991).
- R. *Kāvyaḷaṃkāra of Bhāmaha with 'Ānanda' Hindi Commentary*, By Dr. Ramanand Sharma, Chowkhamba Sanskrit Series 110, Varanasi, 2002.
- U. Ms. in *Udbhaṭa's Commentary on the Kāvyaḷaṃkāra of Bhāmaha*, Ed. R. Gnoli, Roma, 1962.

〈その他のテキスト〉

Nyāyapraveśaka : *Nyāyapraveśa of Diṅnāga with Commentaries of Haribhadra Sūri & Pārśvadeva*, critically edited with Notes and Introduction by A. B. Dhruva, Delhi, 1930 (1987²).

Nyāyamukha : 玄奘訳『因明正理門論^{マフ}本』(大正新修大藏經 No. 1628)

Pramāṇasamuccayaṭīkā : *Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā Chapter 1, Part I: Critical Edition*, by E. Steinkellner, H. Krasser, H. Lasic, Beijing-Vienna, 2005.

〈主要参考文献〉

[岡崎康浩 2005] 『ウッドヨータカラの論理学：仏教論理学との相克とその到達点』平楽寺書店。

[桂紹隆 NM.] 「因明正理門論研究」〔一〕～〔七〕『広島大学文学部紀要』第 37 号, 1977; 第 38 号, 1978; 第 39 号, 1979; 第 41 号, 1981; 第 42 号, 1982; 第 44 号, 1984; 第 46 号, 1987.

[古宇田 2009] 「Bhāmaha 著 Kāvyaḷaṃkāra 『詩の修辭法』 第 3 章：テキストならびに訳註」『長谷川仏教文化研究所年報』第 33 号。

[古宇田 2010] 「Bhāmaha 著 Kāvyaḷaṃkāra 『詩の修辭法』 第 1～2 章：テキストならびに訳註」『長谷川仏教文化研究所年報』第 34 号。

[古宇田 2011] 「Bhāmaha 著 Kāvyaḷaṃkāra 『詩の修辭法』 第 4 章：テキストならびに訳註」『長谷川仏教文化研究所年報』第 35 号。

[小林信彦 1977] 「Bhāmaha に引用される Dignāga と Vasubandhu」『印度学仏教学研究』25-2, pp. 898-893.

[Skt 修辭法研究会 2008] サンスクリット修辭法研究会 「Daṇḍin 著 Kāvyaḷaṃkāra

(30)

『詩の鏡』第1章：テキストならびに訳註』『大正大学総合佛教研究所年報』第30号。

[Skt 修辭法研究会 2009] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第2章（上）：テキストならびに訳註』『大正大学総合佛教研究所年報』第31号。

[Skt 修辭法研究会 2010] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第2章（下）：テキストならびに訳註』『大正大学総合佛教研究所年報』第32号。

[Skt 修辭法研究会 2011] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第3章（上）：テキストならびに訳註』『大正大学総合佛教研究所年報』第33号。

[Skt 修辭法研究会 2012] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第3章（下）：テキストならびに訳註』『大正大学総合佛教研究所年報』第34号。

[大乘仏教9] 『シリーズ大乘仏教9：認識論と論理学』（監修：高崎直道，編者：桂紹隆・斎藤明・下田正弘・末木文美士），春秋社，2012。

[泰本融 1987] 『空思想と論理』山喜房佛書林。

[Tachikawa 1971] Musashi Tachikawa: A Sixth-Century Manual of Indian Logic (A Translation of the NYĀYAPRAVEŚĀ), *Journal of Indian Philosophy*, vol. 1, No. 2.

〈補訂〉

前稿〔古宇田 2011〕の註36は、印刷ミスにより、「ること。」という末尾の4文字が欠落しているので、訂正を乞う次第である。

Romanized Text

{nyāyanirṇayaḥ¹}

1. =R.

atha pratijñāhetvādihīnaṃ duṣṭaṃ ca varṇyate /

samāseṇa¹ yathānyāyaṃ tanmātrārthapratīṭaye // 5. 1 // 1. samāseṇe M.

prāyeṇa durbodhatayā śāstrād bibhyaty amedhasaḥ /

tadupacchandanāyaiṣa hetunyāyalavoccayaḥ¹ // 5. 2 // 1. °valoccayaḥ Ka.

svādukāvyaṛasonmiśraṃ śāstram apy upayūñjate /

prathamālīḍhamadhavaḥ pibanti kaṭu bheṣajam // 5. 3 //

na sa śabda na tad vācyam¹ na sa nyāyo na sā kalā / 1. tadvākyam Ka.

jāyate yan na kāvyāṅgam aho bhāro mahān kaveḥ // 5. 4 //

sattvādāyaḥ pramāṇābhyāṃ pratyakṣam anumā ca te /

asādhāraṇasāmānyaviśayatvaṃ tayoh kila // 5. 5 //

pratyakṣam kalpanāpoḍham sato¹ 'rthād iti kecana /kalpanāṃ nāmajātyādiyojanāṃ² pratijānate³ // 5. 6 //

1. tato K.M.R. 2. nāma jātyo K.R. 3. pratijanyate Gha.

samāropaḥ kilaitāvān sadarthāḷambanaṃ ca tat /

jātyādyapohe vṛtṭiḥ¹ kva kva viśeṣaḥ kutaś ca saḥ // 5. 7 // 1. vṛtṭaḥ K.tadapopheṣu ca¹ tathā siddhā sā buddhigocarā / 1. na N.avastukaṃ ced vitathaṃ² pratyakṣam tattvavṛtti hi // 5. 8 // 2. vitayam Gha.

grāhyagrāhakabhedena vijñānāṃśo mato yadi /

vijñānamātrasādṛśyād¹ viśeṣo 'sya vikalpanā // 5. 9 //

1. vijñānam atra sādṛśyād K.R.

arthād eveti rūpādes tata eveti nānyataḥ¹ / 1. =K.; nyāyataḥ Ga.N.R.anyathā² ghaṭavijñānam anyena vyapadiśyate // 5. 10 // 2. anyadā Kha. Gha.trirūpāl līngato jñānam anumānaṃ ca kecana¹ / 1. kena ca. Ga.tadvido nāntarīyārthadarśanaṃ cāpare² viduḥ // 5. 11 // 2. cāparaṃ N.vivādāspadadharmeṇa¹ dharmī kṛtaviśeṣaṇaḥ² /

(32)

pakṣas tasya ca nirdeśaḥ pratijñety³ abhidhīyate // 5. 12 //

1. =M.; vīvidhāspada° K.N.R. 2. dharmīkṛtavīśeṣaṇaḥ K.R. 3. pratijāpy R.
tadarthahetusiddhāntasarvāgamavirodhinī /

prasiddhadharmā¹ pratyakṣabādhinī² ceti duṣyati // 5. 13 //

1. viruddha° K. 2. °bādhinī K.M.; °vādinī Kha.Gha.
tayaiva hi tadarthasya virodhakarāṇaṃ yathā /
yatir mama pitā bālyāt sūnur yasyāham aurasaḥ // 5. 14 //

asty ātmā¹ prakṛtir veti jñeyā hetvapavādinī /
dharmino 'syāprasiddhatvāt taddharmono² 'pi na setsyati // 5. 15 //

1. asyātmā Ga. 2. tadartho Ka.
śāśvato 'śāśvato veti prasiddhe dharmini dhvanau /
jāyate bheda viṣayo vivādo vādinor mithaḥ¹ // 5. 16 //

1. dhādino miśraḥ Ka.; vādino miśraḥ Gha.
svasiddhāntavirodhitvād vijñeyā tadvirodhinī /
kaṇabhakṣo yathā śabdācācakṣītāvinaśvaram // 5. 17 //

sarvaśāstraviruddhatvāt sarvāgamavirodhinī /
yathā śucis tanuḥ trīṇi pramāṇāni na santi vā¹ // 5. 18 //

1. śucis tanuḥ strainī tatpramāṇāni santi vā K.
ākumāram asaṃdigdhadharmāhitaviśeṣaṇā /
prasiddhadharmeti matā śrotragrāhyo dhvanir yathā // 5. 19 //

pratyakṣabādhinī tena pramāṇenaiva bādhyate /
yathā śīto 'nalo nāsti rūpam uṣṇaḥ¹ kṣapākarāḥ // 5. 20 //

1. kūpam uṣṇaḥ Ka.
san dvayoḥ¹ sadṛśe siddho vyāvṛttas tadvipakṣataḥ /
hetus trilakṣaṇo jñeyo hetvābhāso viparyayāt // 5. 21 //

1. pakṣe K.; dvayo Ga.R.
san dvayor iti yaḥ siddhaḥ svapakṣaparapakṣayoḥ /
abhinnalakṣaṇaḥ pakṣaḥ phalabhedād ayam dvidhā // 5. 22 //

parapakṣānupādāne¹ tadvr̥tteś cānudāhṛtau / 1. parapakṣānupādānaṃ K.R.

katham anyatarāsiddhahetvābhāsavyavasthitiḥ // 5. 23 //

sādhyadharmānugamataḥ sadṛśas tatra yaś ca san /

anyo 'py asāv eka iva sāmānyād upacaryate // 5. 24 //

vīpakṣas tadvisadṛśo vyāvṛttas tatra yo hy asan /

iti dvayaikānugatīvyāvṛttī lakṣmasādhutā¹ // 5. 25 //

1. =N.U.; °vyāvṛttir lakṣmasādhutā M.K.R.; °vyāvṛttī lakṣmasādhunā Gha.

sādhyasādhanadharmābhyāṃ siddho dṛṣṭānta ucyate /

tadviparyayato vāpi tadābhas tadavṛttitaḥ // 5. 26 //

sādhyena liṅgānugatis tadabhāve ca nāstitā /

khyāpyate yena dṛṣṭāntaḥ sa kilānyair dvidhocyate // 5. 27 //

dūṣaṇaṃ¹ nyūnatādyuktir nyūnaṃ hetvādinātha² ca /

tanmūlatvāt kathāyās ca nyūnaṃ neṣṭaṃ pratijñayā // 5. 28 //

1. =M.N.; dūṣaṇa-° K.R. 2. hetvādinātra K.

jātayo dūṣaṇābhāsās tāḥ sādharṃyasamādayaḥ¹ / 1. °samādhayaḥ K.

tāsāṃ prapañco bahudhā bhūyastvād iha noditaḥ // 5. 29 //

aparaṃ vakṣyate nyāyalakṣaṇaṃ kāvyasaṃśrayam /

idaṃ tu śāstragarbheṣu kāvyeṣv abhīhitaṃ yathā // 5. 30 //

atha nityāvinābhāvi dṛṣṭaṃ jagati kāraṇam /

kāraṇam cen na tan nityaṃ nityaṃ cet¹ kāraṇam na tat // 5. 31 //

1. nityaś cet Gha.

lakṣmaprayogadoṣāṇāṃ¹ bhedenānekavartmanā² /

saṃdhādisādhanāṃ siddhyai³ śāstreṣūditam anyathā // 5. 32 //

1. lakṣma prayoga° M. 2. =K.; °nena vartmanā N.R. 3. =N. °sādhanāsiddhyai

M.

tajjñaiḥ kāvyaprayogeṣu tat prāduṣkṛtam anyathā /

tatra lokāśrayaṃ kāvyam āgamās tattvadarśinaḥ¹ // 5. 33 //

1. tattvaśamsīnaḥ K.

(34)

*asisaṃkāśam ākāśam śabdo dūrānupāty ayam /
sadaiva vāri sindhūnām¹ aho sthemā mahārciṣaḥ /
rūpādīnām yathā dravyam āśrayo naśyatīti ca² // 5. 34 //*

1. =M.; tad eva vāpīśindhūnām N.; tad eva vāpi sindhūnām K.R.

2. =M.; naśvarīti yā K.N.R.

*iṣṭakāryābhyupagamam pratijñam pratijānate /
dharmārthakāmakopānām saṃśrayāt sā caturvidhā // 5. 35 //*

*jarām eṣa bibharmīti pratijñāya pitur yathā /
tathaiva puruṇābhāri sā syād dharmanibandhanī // 5. 36 //*

*upalapsye svayaṃ sītām iti bhartṛnideśataḥ /
hanumatā pratijñāya sā jñātey arthasaṃśrayā // 5. 37 //*

*āhariṣyāmy amūm¹ adya mahāsenātmajām iti /
kṛtvā pratijñam vatsena hṛteti madanāśrayā // 5. 38 //* 1. amum K.R.

*bhrātur bhrātṛvyam unmathya¹ pāsyāmy asyāsrg āhave /
pratijñāya yathā bhīmas tac cakārāvaśo ruṣā // 5. 39 //* 1. ūnmathya K.R.

*kāryo 'nyatra pratijñāyāḥ prayogo na kathamcana /
parityāgāś ca¹ kartavyo nāsām catasṛṇām api // 5. 40 //* 1. parityāgasya K.R.

*prāyopaveśāya yathā pratijñāya suyodhanaḥ /
rājyāya punar uttasthāv iti dharmavirodhinī // 5. 41 //*

*āhūto na nivarte 'ham¹ dyūtāyeyi yudhiṣṭhiraḥ /
kṛtvā saṃdhām śakuninā didevety arthabādhinī // 5. 42 //*

1. nivarteya K.; nivṛtte 'ham R.

*adyārabhya nivatsyāmi munivad vacanād iti /
pituh priyāya yām bhīṣmaś cakre sā kāmabādhinī // 5. 43 //*

*atyājayad yathā rāmaḥ sarvaḥ satravadhāśrayām /
jāmadagnyaṃ yudhā¹ jītvā sā jñeyā kopabādhinī // 5. 44 //* 1. yathā Gha.

*athābhyupagamaprāptiḥ saṃdhābhyupagamād vinā /
anuktam api yatrārthād abhyupaiti yathocyate // 5. 45 //*

kim indriyadvīṣā¹ jñeyaṃ ko nirākriyate² 'ribhiḥ /
ko vā gatvaram arthibhyo na yacchati dhanam laghu /
 kimatyayaṃ tu yaḥ kṣepaḥ saukaryaṃ darśayaty asau // 5. 46 //

1. °dviṣām Ka. 2. nirākṛtaye K.R.

hetus trilakṣmaiva mataḥ kāvyeshv api sumedhasām /
anvayavyatirekau hi kevalāv arthasiddhaye // 5. 47 //
yathābhito vanābhogam etad asti mahat saraḥ /

kūjanāt kurarīṇām¹ ca kamalānām ca saurabhāt // 5. 48 // 1. °kurarāṇām
 K.R.

anyadharmo 'pi tatsiddhiṃ saṃbandhena karoty ayam /
dhūmād abhramkaṣāt sāgneḥ pradeśasyānumām iva // 5. 49 //

apṛthakkṛtasādhyo 'pi hetuś cātra pratīyate /
anvayavyatirekābhyāṃ vinaivārthagatir¹ yathā // 5. 50 // 1. vinaikārthagatir
 Ka.

dīpradīpā niśā jajñe vyapavṛttadivākara /
hetuḥ¹ pradīpradīpatvam² apavṛttau raver iha // 5. 51 //

1. hetu-° K.R. 2. pradīpadīpatvam K.R.

tasyāpi sudhiyām iṣṭā doṣāḥ prāguditās trayah /
ajñānasamśayajñānaviparyayaḥ yathā // 5. 52 //

kāśā haranti hṛdayam amī kusumasaurabhāt¹ /
apām abhyarṇavartitvād ete jñeyāḥ śarārayaḥ² // 5. 53 //

1. °sāhṛdāt Ka. 2. =M.; śarārayaḥ K.N.R.

asau śuklāntanetravāc cakora iti gṛhyatām /
tulyajātāv adṛṣṭatvāt sādhayaty acakoratām // 5. 54 //

uktasyārthasya dṛṣṭāntaḥ¹ pratibimbanidarśanam /
nanūpamānumaivāstu² na hetvanabhidhānataḥ // 5. 55 //

1. dṛṣṭāntaṃ K.R.; dṛṣṭānām Gha. 2. nanūpamānamevāstu K.
 sādhyasādhanayor uktir uktād anyatra neṣyate /

(36)

mukhaṃ padmam ivety atra kiṃ sādhyam kiṃ ca sādhanam // 5. 56 //
iti prayogasya yathā kalāv api bhavān iha /
śreyān vṛddhānuśiṣṭatvāt pūrve kṛtayuge¹ yathā // 5. 57 //

1. =M.; kṛtayuge K.N.R.

yatra dṛṣṭāntamātreṇa vyajyete¹ sādhyasādhanē / 1. =K.M.R.; tyajyete N.
tam āhuḥ śuddhadṛṣṭāntam tanmātrāviṣkṛter yathā // 5. 58 //
bharatas tvaṃ dilīpas tvaṃ tvam evailaḥ purūravāḥ /
tvam eva vīrapradyumnas¹ tvam eva naravāhanaḥ // 5. 59 //

1. vīra pradyumnas K.M.N.R.

katham ekapadenaiva vyajyerann asya te guṇāḥ /
iti prayuñjate santaḥ kecid vistarabhīravaḥ // 5. 60 //
padam ekaṃ varam¹ sādhu nārvācīnanibandhanam² /
vaiparītyād viparyāsam kīrter api karoti tat // 5. 61 //

1. =M.; param K.N.R. 2. °cīnam nibandhanam K.

ahṛdyam asunirbhedaṃ rasavattve 'py apeśalam /
kāvyaṃ kapittham āmaṃ¹ yat keśāṃcit tādṛśam² yathā // 5. 62 //

1. āmraṃ K. 2. =M.; sadṛśam K.N.R.

prajājanaśreṣṭhavarīṣṭhabhūbhṛcchiorcitāṅghreḥ¹ pṛthukīrtidhiṣṇya² /
ahighnapadmasya³ jalāridhāmnas tavaiva nānyasya sutasya vṛttam // 5. 63 //

1. °chirocitāṅghreḥ K.R. 2. °dhiṣṇyaḥ Gha. 3. yahighnapadmasya Gha.

aṃśumadbhiś ca maṇibhiḥ phalanimnaiś ca śākhibhiḥ /
phullaiś ca kusumair anyair¹ vāco 'laṃkurvate² yathā // 5. 64 //

1. anye M. 2. =M.; 'laṃkurute K.N.R.

śubhamarakatapadmarāgacitre saphalasaḥpallavabhūricāruvrkṣe¹ /
bahukusumavibhūṣite sa tasthau suramunisiddhayute sumerupṛṣṭhe // 5. 65 //

1. °vṛtte K.R.

tad ebhir aṅgair bhūṣyante bhūṣaṇopavanasrajaḥ /

vācāṃ vakrārthaśabdoktir alaṃkārya kalpate // 5. 66 //

viruddhapadam asvarthaṃ bahupūraṇam¹ ākulam /

kurvanti kāvyam apare vyāyatābhīpsayā yathā // 5. 67 // 1. bahupuraṇam R.

elātakkolanāgasphuṭabakulalatācandanaspandanādhyo

muktākarpūracakrāgarukamanaśīlāsthāsakavyāptatīraḥ¹ /

śaṅkhavrātākulo 'ntastimimakarakulākīrṇavīcīpratāno²

dadhre yasyāmburāśīḥ śaśikumudasudhākṣīrasūddhām³ sukīrtim // 5.

68 //

1. =M.; °nādhyasṛkkākarpūracakrāgurumanaḥśīlādhyāmakāvyaṅgīptatīraḥ K.R.;

sṛkkākarpūracakrāgarukamanaśīlāyāmakāvyaṅgīptatīraḥ N.; sṛkkākarpūracakrāgarumanaḥśīlādhyāmakāvyaṅgīptatīraḥ R.

2. śaṅkhavrātākulāntastimimakara° K. R.; 'ntastitimidakarakulā° M.

3. śaśikumada° K.

iti nigaditās tās tā vācāṃ alaṃkāryayo mayā

bahuvīdhakṛtīr dṛṣṭvānyeṣāṃ svayaṃ paritarkya ca /

prathitavacasaḥ santo 'bhijñāḥ pramāṇam ihāpare

gurutaradhiyām asvārādham¹mano'kṛtabuddhibhiḥ // 5. 69 //

1. = K.M.R.; asvārādham N.

iti bhāmahāḷaṃkāre pañcamaḥ paricchedaḥ¹

1. =K.M.; N. *omits.*; ity ācāryabhāmahaviracite kāvyāḷaṃkāre nyāyanirṇayo nāma pañcamaḥ paricchedaḥ. R.

訳註

5. 1. これより、主張命題^{ブラティジニヤー}や証因^{ヘートウ}等の欠落と欠陥とが、簡潔かつ正理^{ニヤーヤ}に従って、それ（＝正理）一般の事義^{いみ}の理解のために叙述される。
5. 2. たいてい、知力に乏しい人々は難解であることから教典を恐れる。彼らの説得のために、この証因^{ヘートウ}に関する正理^{ニヤーヤ}の摘要が〔作られたのである〕。
5. 3. 〔人々は〕甘い詩の汁^{ラサ}（／情緒）が混ざっていれば、教典であっても服用する。最初に蜜を舐めた人々は、苦い薬を飲むものである。
5. 4. 詩の一部とならないものは、音声^{ことば}ではなく、意味^{ヴァーチャ}ではなく、正理^{ニヤーヤ}ではなく、芸術^{カラ}ではない。ああ、詩人の責任はなんと大きいことか！
5. 5. 認識根拠^{ブラマーナ}によって、存在等^{サットワ}が〔生じる〕。それら（＝認識根拠）は直接知覚と推論の2つである⁷。周知の通り、その両者は、個別と普遍を対象としている。
5. 6. ある人々は、直接知覚は、概念知^{カルバナ}が排除されたものであり、存在している事義^{もの}から〔生じたものである〕と〔考え〕、概念知を名称^{ナーマン}や種類^{ジャーティ}等⁸を結びつけるものと認識している⁹。
5. 7. 周知の通り、付託^{サマーローパ}とはこのようなものである。また、それ（＝直接知覚）は存在する事義^{もの}を知覚対象^{アーランバナ}としている。種類^{ジャーティ}等を排除したとき、働き^{ヴリッティ}はどこにあるか？ 特性^{ヴィシエーシャ}はどこにあるか？ それ（＝

⁵ R.には、「正理の確定 (nyāyanirṇaya-)」という章題がある。

⁶ 以下、pratiñā-には「主張命題」という訳語を与えたが、これは、pakṣa-「主張」と区別したまでであり、文脈からすれば、「主張」や「誓言」という訳語の方がふさわしい箇所もある。

⁷ 〔小林信彦 1977〕によれば、この文は Pramānasamuccaya 1. 2ab : pratyakṣam anumāṇam ca pramāṇe 「直接知覚と推論とが2つの認識根拠である。」に基づくとされる。

⁸ 名称 (nāman-)、種類 (jāti-)、属性 (guṇa-)、行為 (kriyā-)、実体 (dravya-) の5つ。

⁹ Cf. Nyāyamukha 7. 1. 現量除分別 余所説因生。

事義)はどこから生じようか?

5. 8. そして、それを排除したとき、同様に、思考を領域とする〔概念知〕は成立している。もしも直接知覚が実体を〔対象として〕もたないならば、非実在(=無益なもの)である。なぜならば、〔直接知覚は〕^{タットヴァ}実在の働きであるから。

5. 9. もしも所取と能取の違いにより、認識の肢分を考えるならば、唯識との類似性により、その特性は分別である。

5. 10. 「〔直接知覚は〕まさに事義より〔生じる〕」(5. 6)とは、その形色などより〔生じる〕のであって、それ以外からは〔生じ〕ない。さもないければ、壺という認識は、〔事義以外の〕他のものによって命名されることになるから。

5. 11. ある人々は、3種の証相^{リンガ}によって知ることを推論であると〔知る〕¹⁰。他の人々は、〔推論を〕それを知る人にとって不可離の関係にある事義を見ることであると知る¹¹。

5. 12. 論争^{ヴィヴァーダ}の場である属性によって作られた限定辞をもつ属性保有者が主張である。そして、それについて述べる^{ダルマ}ことが主張命題^{ダールミンバクシャ}と呼ばれる。

5. 13. (1)それ(=主張)の事義^{いみ}に関する〔矛盾を含む主張命題〕、(2)証因^{ヘトウ}に関する〔矛盾を含む主張命題〕、(3)定説に関する〔矛盾を含む主張命題〕、(4)全ての聖伝に関する矛盾を含む〔主張命題〕、(5)一般に受け入れられている属性をもつ〔主張命題〕、(6)直接知覚によって論破されるべき〔主張命題〕、以上が〔主張命題の〕欠陥である。

5. 14. 実に、まさにその〔主張命題〕によって、それ(=主張)の事義

¹⁰ 〔小林信彦 1977〕によれば、この文は Pramāṇasamuccaya 2. 1 : trilingād yad anumeye jñānaṃ tad anumānaṃ 「3つの証相により推論の対象について知ることが推論である」に基づくとされる。

¹¹ 〔小林信彦 1977〕が指摘するように、この文は Vādaividhi : nāntarīkāṛthadarśanaṃ tadvido ’numānaṃ に基づいている。これに関する Uddyotakara の解説は〔岡崎康浩 2005: 174〕を参照されたい。

との矛盾を作るものが、〔その事義に関する矛盾を含むもの〕である——例えば、次のように。yatir mama pitā bālyāt, sūnur yasyāham aurasaḥ.

(私の父は幼少期からの行者である。私は彼の母乳で育てられた息子である。) ¹²

5. 15. *asty ātmā prakṛtir vā.* (自 我 も しくは 原 質 が 存在 する) というのは、^{ヘートゥ}証因に関して論難のある〔主張命題〕として知るべきである。この^ダ属性保有者(例えば、自我や原質)が一般に受け入れられていないものであることにより、その^ダ属性も成立することはないであろう。

5. 16. 属性保有者が一般に受け入れられている——〔例えば〕音声に関して——ならば、互いに主張のある両者にとって、「常住である、あるいは常住ではない」というように、相違を対象とする^{ヴィヴァーダ}論 争が生じる。

5. 17. 例えば次のような〔文〕は、自己の^{シッダーンタ}定 説と矛盾することにより、それに関する矛盾を含む〔主張命題〕と認識されるべきである——*kaṇabhakṣo śabdācācaṣṭītāvinaśvaram.* (カナダ¹³は、^{シャブダ}音声^{アヴィナシュヴァラ}を不滅のものと述べるにちがいない。) ¹⁴

5. 18. 例えば次のような〔文〕は、全ての教典と矛盾することにより、全ての聖典に関する矛盾を含む〔主張命題である〕と〔認識される〕——*śucis tanus.* (肉体は清浄である)、あるいは *trīṇi pramāṇāni na santi.* (3^{ブラマナーナ}つの認識根拠は存在しない)。

5. 19. 児童にも疑問のない属性によって限定辞が置かれたものが、一般に受け入れられている属性をもつ〔主張命題〕である——例えば、次のように。*śrotragrāhyo dhvaniḥ* (聴覚によって把握される音声) ¹⁵。

¹² Śāṅkaravāmin は、Nyāyapraveśaka で次のような例を挙げる：svavacanaviruddho yathā mātā me bandhyeti. 「自身の陳述と矛盾しているものとは、例えば「私の母は不妊症の女性である」という〔主張〕である。」

¹³ Kaṇabhakṣa-/Kaṇabhuj-/Kaṇāda-は、Vaiśaṣika 学派の開祖の名。

¹⁴ Cf. Nyāyapraveśaka: āgamaviruddho yathā vaiśeṣikasya nityaḥ śabda iti sādhyataḥ. 「聖伝と矛盾しているものとは、例えば、「音声は常住である」と論証しているヴァイシェーシカ学徒の〔主張〕である。」

¹⁵ Cf. Nyāyapraveśaka: prasiddhasambandho yathā śrāvaṇaḥ śabda iti. 「〔限定辞と非限定辞の〕両者が一般に承認されているものとは、例えば「耳で聞くものが音声である」という〔主張〕である。」

5. 20. 直接知覚によって論破されるべき〔主張命題〕は、まさにその認識根拠によって論破されるものである——例えば、次のように。 *śīto ḥalah.* (火は冷たい), *nāsti rūpam.* ([火には] 色がない), *uṣṇaḥ kṣapākarah.* (月は暑い)。

5. 21. 両方¹⁶にとって存在しており、同類例において成立しており、その異類例においては排除されている、という 3 つの特質が証因にはある、と知られるべきである。その逆は、疑似証因である。

5. 22. 「両方にとって存在している」とは、自分の主張と対論者の主張という両方にとって成立していることであり、異ならない特質をもつこの主張が、結果の相違により 2 種になるのである。

5. 23. 対論者の主張において容認されない場合、また、その生起が例示されない場合、どうして、どちら側かに疑似証因の確定が成立していないことがあるか? (=必ず成立している)

5. 24. 論証対象の属性が随伴することにより、そこに〔証因が〕存在するものが、同類例^{サドリシヤ}なのであり、それが別のものであっても、共通性により同一のもののように用いられるものである。

5. 25. そこに〔証因が〕存在しないものが、それ (=主張) と同類であることを欠いている異類例^{ヴィバクシヤ}であり、排除されているものである。このように、2 つ 1 組 (=主張と同類例) ^{バクシヤ}における随伴ならびに 1 つ (=異類例) ^{サバクシヤ}における排除があり、定義が正しいことになる。

5. 26. 論証対象の属性と論証の属性とによって、喩例が成立すると言われている。もしくは、その逆であること (=論証対象の属性と論証の属性との不一致) により、それ (=論証) の働きをもたないゆえに、疑似のそれ (=喩例) と〔言われるものが存在する〕。

5. 27. 論証対象によって証相^{リンガ}の随伴がある場合と、それ (=論証対象) がなく、〔証相が〕存在しない場合がある。ゆえに、周知の通り、他の

¹⁶ 次の偈に述べられるように、「両方」とは、自己の主張 (pakṣa-) と対論者の主張と 2 つを指す。

人々によって、その喩例と名づけられるものは2種であると言われる¹⁷。

5. 28. ^{ドゥーシヤナ}論破とは、欠如していること等の指摘である¹⁸。証因等の欠如は受容できない、いわんや、論述がそれを基礎とすることから、主張命題の欠如はどうてい受容できない。

5. 29. ^{ジャーティ}誤難とは、^{サーダルミヤ・サマ}疑似論破である¹⁹。それらは、同法相似²⁰等である²¹。それらの広がりは多様である。多様であることから、ここでは述べない。

5. 30. 詩に関する正理の定義は、後で述べられる。しかしながら、教典に含まれている諸々の詩においては、これが、次のように述べられている。

5. 31. さて、世界においては、^{カーラナ}原因は常に〔結果と〕必然関係にあることが経験的に知られる。〔あるものが〕もしも原因であるならば、それは常住でありえず、〔あるものが〕もしも常住であるならば、それは原因ではない。〔それゆえ、原因にこだわることに何の意味があろうか。〕

5. 32. 他方、定義と論証式と欠陥に関する、多くの流儀をもつ区別によって、〔それらの〕関連等の論証が、〔論証の〕成立のために、諸教典において別のやり方で述べられている。

5. 33. それを知る人々は、詩の実作において、別のやり方でそれを目に見える形にする。そのうち、^{カーヴィヤ}詩は常識を拠り所とするものであり、^{アーガマ}聖伝は真実を示すものである。

5. 34. 〔詩においては、以下の表現も許容される。〕

asisaṃkāśam ākāśaṃ. (剣のような空。)

śabda dūrānupāty ayam. (この音声は遠くから飛来するものなり。)

sadaiva vāri sindhūnām. (シンドウ河の水は永遠なり。)

¹⁷ Cf. Nyāyamukha 5. 説因宗所隨 宗無因不有 此二名譬喩 余皆此相似。

¹⁸ Cf. Nyāyamukha 9. 能破闕等言。

¹⁹ Cf. Nyāyamukha 9. 似破謂諸類。

²⁰ *sādharmyasama*-の玄奘訳。この概念については〔桂紹隆 NM. : [六]〕に詳しい説明がある。

²¹ Cf. Nyāyamukha 9. 所言似破謂諸類者。謂同法等相似過類名似能破。

[それに対し、聖伝の] *aho sthemā mahārciṣaḥ, rūpādīnām yathā dravyam āśrayo naśyati*. (偉大な光輝をもつもの (=太陽) が静止していることはなんと不思議なことか! —例えば、形色等の^{ルーバ} 拠り所である実体が滅するのに [ひきかえ]。22) [という表現は、真実を示している]。

5. 35. 望ましい結果を確約することが、主張命題を主張することである。それは、^{ダルマ} 正法と^{アルタ} 実利と^{カーマ} 愛欲と^{コーバ} 憤怒を拠り所とすることから 4 種である。

5. 36. *jarām eṣa bibharmīti pratijñāya pitur yathā tathaiva puruṇābhāri*. (プルが「私が老後を介護しましょう」と父親に主張した後、まさにその通りに介護した) というのは、正法に結びついた [主張命題] にちがいない。

5. 37. *upalapsye svayaṃ sītām iti bhartṛnideśataḥ hanumatā pratijñāya sā jñātā*. (ハヌマットが、主人の命令により、「私自身がシーターを見つけよう」と主張した後、彼女が見つけれられた) というのは、実利を拠り所とする [主張命題] である。

5. 38. *āhariṣyāmy amūm adya mahāsenātmajām iti kṛtvā pratijñāmy vatsena hṛtā*. (ヴァツツァ王が「私は、直ちにこのマハーセーナ王の娘を連れてきましょう」と主張した後、[実際に] 連れてきた) というのは、愛欲を拠り所とする [主張命題] である。

5. 39. *bhrātur bhrātṛvyam unmathya pāsyāmy asyāsṛg āhave, pratijñāya yathā bhūmas tac cakārāvaśo ruṣā*. (ビーマが「戦闘において兄弟の宿敵を斬り殺して、彼の血を飲んでやろう」と主張した後、怒りにより我を忘れた [彼]

22 空と剣は共通する属性として青色をもつことは常識であるが、実物としての空と剣は、全く別物である。また、音声の属性は、遠くから飛来する運動 (*kriyā*-) であると常識では理解されるが、正確には、音声は本来、虚空等の属性であって、この表現のような運動の主体 (例えば、矢のようなもの) ではない。また、大河の水は、全く変わらず永遠にあるように見られるのが常識であるが、実際には瞬間ごとに常に入れ替わっており、その流れも、全く同じ場所を流れているわけではない。以上のように、詩は常識を拠り所として成立している。それに対し、聖伝の「偉大な光輝をもつもの (=太陽) が静止していることはなんと不思議なことか!」という文句は、太陽は夕方には沈んで消えてしまうため、常識としては成り立たないが、太陽という実物そのものは移動するものではない (と当時のインド人は考えていた) ため、真実を示していることになる。

は、その通りにそれを実行した) [というのは、憤怒を抛り所とする主張命題である]。

5. 40. これ以外の場合に、けっして主張命題を使用してはならない。これら4つの〔主張命題〕に関しては、放棄をなすべきではない。

5. 41. *prāyopaveśāya yathā pratijñāya suyodhanaḥ rājyāya punar uttasthau.* (スヨーダナが断食死を主張した後に、再び王国に戻ってきた) というのは、正法に関する矛盾を含む〔主張命題〕である。

5. 42. *āhūto na nivarte haṃ dyūtāyeti yudhiṣṭhiraḥ kṛtvā saṃdhām śakuninā dideva.* (ユディシュティラが「呼びつけられたとき以外、私はサイコロ賭博をしません。」と約束した後、[自ら] シャクニとサイコロ賭博をした) というのは、実利に反する〔主張命題〕である。

5. 43. *adyārabhya nivatsyāmi munivad vacanād iti pituḥ priyāya yām bhīṣmaś cakre.* (ビーシュマが、主君の寵愛を受けるために「以後、聖者のように、沈黙するでしょう」と[主張をした後にそれを]行なった) というのは、愛欲に反する〔主張命題〕である。

5. 44. *atyājayad yathā rāmaḥ sarvaśatradhāśrayām jāmāgnyam yudhā jītvā.* (ラーマは、ジャマッド・アグニの息子に、戦いによって勝利した後、^{クシャトリヤ} 後に全ての武士たちを殺害するという企みを捨てさせた) というのは、憤怒に反する〔主張命題〕として知られるべきである。

5. 45. これより、約束として確約していないのに、確約が得られる〔主張命題を述べる〕。[それは] 述べられていなくとも、^{いみ} 事義により、あたかも述べられているかのように、あることに到達するものである。

5. 46. *kim indriyadvīṣā jñeyaṃ.* (感官を敵とする者は、何を知るのか? [答えは、一切/ブラフマン。]) 〈正法を抛り所とする主張命題〉

ko nirākriyate 'ribhiḥ. (敵意をもつ人々によって、誰が撃退されるか? [答えは、この世で最も強い者。]) 〈憤怒を抛り所とする主張命題〉

ko vā gatvaram arthibhyo. (移ろいやすいもの (=愛情) を欲する人々に對して、誰が[現れるか]? [答えは、恋人。]) 〈愛欲を抛り所とする主張命題〉

na yacchati dhanam laghu. (たやすく富を与えることがないのは「誰か」？
[答えは、吝嗇家。])²³ <実利を抛り所とする主張命題>

他方、罵りである「何／誰」の帰着点(=答え)は²⁴、容易に実行できることを示している。

5. 47. 賢者たちが作ったものであれば、詩においても、証因はまさに3つの特徴を有すると考えられる。

5. 48–49. じつに独立した随伴関係と排在関係は、事義の成立に役立つ——例えば、次のように。*abhito vanābhogam etad asti mahat saraḥ kūjanāt kurarīṇām ca kamalānām ca saurabhāt.* (鶯²⁵たちの鳴き声と、蓮華の芳香により、森の縁に面して、ここに大きな池が存在する[という推論が成り立つ]²⁶。)[このように]この他のものの属性でさえも、関連により、それ(=事義)の成就を作るのである——空高く上がる煙により、どこかに火があることを推論するように。

5. 50. ここでは、論証対象と別に生じることがない証因が認識されるからである。例えば次の[文の]ように、まさに随伴関係と排在関係の両者がなくとも、事義の理解がある[場合もある]。

5. 51. *dīpradīpā niśā jajñe vyapavṛttadivākārā.* (輝く灯明をもつ夜は、太陽が[住まいに]帰ったものとなった。)ここでは、太陽が[住まいに]帰る

²³ Nは、*ko vā gatvaram arthibhyo na yacchati dhanam laghu.*を1文に解釈する(これによれば、「移ろいやすいものを乞う人々に、たやすく富を与えることがないのは誰か?」という訳になる)が、それでは愛欲を抛り所とする主張命題がなくなってしまうため、2文に解釈した。

²⁴ 2語目に現れる *tu* が後続するため、*kim-atyaya-*は、複合語に解した。

²⁵ 鷹の一種で、水中の魚を餌とする。

²⁶ この用例の主張は「森の縁に面して、ここに大きな池が存在する。」であり、証因は、「鶯たちの鳴き声と、蓮華の芳香が存在するから。」であり、これの随伴関係は、「およそ鶯のいるところには、必ず池がある——例えば、某池のように。およそ蓮華のあるところには、必ず池がある——例えば、某池のように。」であり、これの排在関係は、「およそ池のないところに、鶯はいない——例えば、某森のように。およそ池のないところに、蓮華はない——例えば、某森のように。」である。

ことに関して、輝く灯明をもつことが証因となっている〔ので疑似証因なのである〕²⁷。

5. 52. これについても、賢い人々によって欠陥であると主張されており、3種であると以前に述べられた。〔それらは〕無知と疑惑と知識の顛倒から成る——例えば次のように。

5. 53. *kāsā haranti hṛdayam amī kusumasaṅgabhāt.* (あの葦は、花の芳香によって心を奪う。) 〈葦の花に芳香はないから、無知の例。〉

apām abhyarṇavartitvād ete jñeyāḥ śārārayaḥ,

(これらは、水の近くに位置することから、アオサギと知るべきである。)

(水の近くにいる鳥はアオサギと限らないから、疑惑の例。)

5. 54. *asau śuklāntanetratvāc cakora iti gṛhyatām.*

(あれは、白い目尻を有することから、チャコーラ鳥と理解すべきである。)

(チャコーラ鳥は目尻が赤いから、知識の顛倒の例。)[ここでは]同類のものにおいても、〔白い目尻は〕見られないことから、チャコーラ鳥でないことを論証している。

5. 55. 述べられた事義に関して、類似物を例示することが^{ドリシュターナ} 喩例である。〔対論者が〕直喩は、まさに推論なのではあるまいか?〔と尋ねれば、〕「違う」〔と私は言う。〕〔直喩の場合は、〕証因を述べないからである。

5. 56. 論証対象と論証の両者を述べることは、〔意図的に〕述べられる場合を除いて、〔賢者たちにとって〕好まれない。*mukhaṃ padmam iva*

²⁷ すなわち、この例文における主張は「太陽が〔住まいに〕帰った」であり、証因は「(夜が)輝く灯明をもつから」であることになるが、随伴関係も排在関係も存在しないから、疑似証因である。仮に、随伴関係として「およそ輝く灯明をもつものは、太陽を〔住まいに〕帰らせる、たとえば甲のように」、排在関係として「およそ輝く灯明をもたないものは、太陽を〔住まいに〕帰らせない、たとえば乙のように」の「甲」「乙」に相当するものが存在すれば、三支作法と呼ばれる論証式は成立することになるが、そのようなものは存在せず、「たとえ輝く灯明があろうとなかろうと、夕方には太陽は〔住まいに〕帰る」という批判を免れないであろう。

(顔は蓮のようである)というこの〔文〕において、何が論証対象であり、また何が論証であろうか。

5. 57. このような論証式(／実作)については、例えば次のようなものがある—*kalāv api bhavān iha śreyān, vṛddhānuśiṣṭatvāt, pūrve kṛtayuge yathā*. (貴方様は、カリ期ユガの今も立派である。なぜなら〔貴方様は〕長老に教育されたからである。あたかも、かつてのクリタ期ユガにおけるように。)

5. 58. 喩例ドリシュターナタのみによって、論証対象と論証の両者が示されているならば、それ(＝喩例)のみが表示されているから、人々はそれを純粋な喩例シュウダ・ドリシュターナタであると言う—例えば、次のように。

5. 59. *bharatas tvam dilīpas tvam tvam evailaḥ purūravāḥ,*
tvam eva vīrapradyumnas tvam eva naravāhanaḥ.

(貴方はバラタ。貴方はディリーパ。まさに貴方はエーラ・ブルーラヴァス。まさに貴方はヴィーラ・プラディユムナ。まさに貴方はナラヴァーハナ。)

5. 60. *katham ekapadenaiva vyajyerann asya te guṇāḥ*. (どのようにしたら、まさに1語のみによって、ここにいる貴方の美德が示されるというのか?)と、ある偉大な〔詩人たち〕は²⁸、冗長を恐れて作詩する。

5. 61. 最上の1語は、現代的な言い回しではなくても良いものである。〔しかしながら〕その反対であれば、その〔1語〕は名声の喪失すらもたらす。

5. 62. 心地良くなく、〔意味が〕はっきりしない〔詩〕は、具情緒ラサヴァットであったとしても、美しくない。ある〔詩人〕たちのそのような詩は、熟していないカピッタの実である—例えば、次のように。

5. 63. *prajājanaśreṣṭhavarīṣṭhabhūbhṛcchirorcitāṅghreḥ pṛthukīrtidhiṣṇya,*
ahighnapadmasya jalāridhāmnas tavaiva nānyasya sutasya vṛttam.

(広大な名声を住居とするものよ、息子の獲得は、最高・最上の末裔である諸王の頭によって礼拝される足をもち、大蛇を殺すもの(＝インドラ)の蓮にして、

²⁸ この pl. が〈尊敬の pl.〉として用いられているならば、「ある偉大な〔詩人〕は」と訳すべきである。

水の敵を住まいとする、まさに貴方について〔言っているの〕であって、他人について〔言っているの〕ではありません。）

5. 64. 〔ある詩人たちは、〕輝きを放つ宝石や、果実によってしなだれた樹木や、満開の花や、その他のものによって言葉を飾っている——例えば、次のように。

5. 65. *śubhamarakatapadmarāgacitre saphalasapallavabhūricāruvṛkṣe,*

bahukusumavibhūṣite sa tasthau suramunisiddhayute sumerurpṛṣṭhe.

(美しい翠緑玉や蓮華の紅をもつもの(＝ルビー)によって色どり艶やかな、果実や蕾でいっぱい美しい樹木をもち、多くの花によって飾りつけられた、神々・聖仙^{シッダ}・天人の住む須弥山^{スメール}の後背に、彼は住んでいました。)

5. 66. それ故、装飾や庭園や花環は、この肢体とともに飾られるのである。諸々の語の捻った事義や言葉の表現は、^{かざり}修辭法に役立つのである。

5. 67. 他の人々は、相反する語をもち、上品でない事義をもち、多くの〔言葉〕を詰め込んだ、雑然とした詩を、〔ただ〕長くすることを欲して作っている——例えば、次のように。

5. 68. *elātakkolanāgasphuṭabakulalatācandanaspandanādhyo*

muktākarpūracakrāgarukamanaśilāsthāsakavyāptatīraḥ,

śaṅkhavrātākulo 'ntastimimakarakulākīrṇavīcīpratāno

dadhre yasyāmburāśiḥ śaśikumudasudhākṣīraśuddhāṃ sukīrtim.

(カルダモン・ペイラムノキ・ナーガ樹・開花したバクラ樹・蔓草・白檀^{チャンドナ}・スパンダナが生い繁り、真珠・樟脳・チャクラ鳥・沈香樹・アショークア樹・石・泡で満ちた岸を有し、大量の貝に満ち、内部にクジラやサメの集団に満ちた波という巻きひげを有する海は、月や白睡蓮^{クムダ}や花密^{スダー}や牛乳のように純白の良い名声を博した。)

5. 69. 以上、この言葉に関する諸々の^{かざり}修辭法は、私が他の〔学者の書いた〕多くの種類の書物を参照し、そして自分で考えてから述べたものである。ここにおいて、〔正理に〕精通し論述をなした他の聖者たちは、〔私にとって〕認識根拠で〔あった〕。心に確信が得られていない人々によつ

ては、すぐれた智慧をもつ人々の十分な満足を得られないからである。

以上が、バーマハの修辭法における第 5 の ^{バリツチエーダ} 章 である。

(当研究所専任研究員)